

## 日本における郁達夫研究：鈴木正夫氏の研究を例に

李, 麗君

九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門：准教授：言語教育学

<https://doi.org/10.15017/25668>

---

出版情報：言語文化論究. 29, pp.113-129, 2012-10-24. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## 日本における郁達夫研究

### — 鈴木正夫氏の研究を例に

李 麗 君

日本における郁達夫研究を考える前に、中国における郁達夫研究の大きな流れを確認しておこう。「中華民国」(1912-1949)時代の作家として、郁達夫(1896-1945)は、1920年代からその名が世に知られるようになった。新中国(1949-)樹立後、郁達夫のような文学者は、共産主義革命とは無縁なものと思われ、1950年代後半から1980年代初頭までの30年間においては、文学史や文学研究から排除されてきた。しかし、1980年代に入って、再び脚光を浴びるようになったのである。彼に関する研究成果の数を見ても、魯迅などには及ばないが、第二級の作家として、かなり注目されていたことが分かる<sup>1</sup>。

日本の場合、外国文学(中国文学)研究として郁達夫研究は行われ、その研究者も、大学に所属する中国文学研究者がほとんどで、決して多くはないが、戦前から現代まで継続して研究がおこなわれてきた。戦前では、同時代作家である郁達夫についての紹介、記事、回想、訪問記などが早い段階に現われた。後述の伊藤虎丸・稲葉昭二・鈴木正夫共編の『郁達夫資料』によると、1923年11月の、名古屋の漢詩誌『雅声』(雅声社)<sup>2</sup>28集に掲載された「嘯雲山人」「如是録」はその最初のものである。1920年代後半から、郁達夫の中国文壇での地位の確立につれて、関連記述が多くなってきた。山上正義「南支那文学者の群」(『新潮』24巻2号、1927年2月)、佐藤春夫「西湖の遊を憶ふ」(『セルパン』55号、1935年9月)、小田嶽夫「支那作家覚書」(『新潮』33巻2号、1936年2月)、一戸務「来朝中の郁達夫」(『時事新報』1936年12月8、9日)、鹿地亘「上海通信その二」(『文学評論』3巻4号、1936年4月)などが、いずれも文献的資料的価値の高いものであった。研究の面では、竹内好「郁達夫覚書」(『中国文学月報』22号、1937年1月)があり、当時中国の郁達夫研究からの影響を受けた面もあるが、日本最初の本格的郁達夫研究として、研究史上における意義は大きい。

戦後になると、郁達夫研究は著しい進展を見せた。伊藤虎丸、稲葉昭二両氏はいち早く郁達夫資料の収集整理作業に着手し、1961年には両氏による「郁達夫研究資料初稿」(『中国文学研究』1号)が完成した。後に鈴木正夫氏も加わり、収集整理の作業はさらに加速し、三氏の協力のもと、日中両国で高く評価された『郁達夫資料』シリーズが出版された。これは新たな分野を切り開くという意義を有する大作となった。さらに、伊藤虎丸「『沈淪』論」(『中国文学研究』1号、1961年4月、同3号、1964年12月)<sup>3</sup>は、明確な方法意識を持ち理論的な枠組みを設けて、郁達夫の代表作『沈淪』に対し、厳密かつ周到な考察を行ったもので、郁達夫研究に新境地を開いた。1990年代以降、新世代の研究者が活躍し始め、優れた研究業績を挙げて、日本の郁達夫研究の主力となってきている。胡金定『郁達夫研究』(東方書店、2003年2月)、高橋みつる「郁達夫と孫荃・王映霞一家・家族・愛の視点から」シリーズ(『愛知教育大学研究報告・人文・社会科学』55、2006年、56、2007年、57、2008年)、桑島道夫「郁達夫・その「告白」のかたち—「沈淪」「蕩蘿行」を中心として」(『静岡大

学人文学部人文論集』50[2]、2000年)、「葛西善蔵と郁達夫—「悲しき父」「子をつれて」と「葛蘿行」の比較を中心として」(『アジア遊学』[13]、2000年)、大東和重『郁達夫と大正文学—〈自己表現〉から〈自己実現〉の時代へ』(東京大学出版会、2012年1月)などの研究成果は、日本人、日本文化あるいは日本の学術環境を背景として、新しい視角、資料、方法を学術界に提供してくれるものであり、日本に止まらず、中国における郁達夫研究にも大きく寄与するものと言える。

ここでは、日本の郁達夫研究の歴史と中国側の研究の双方を視野に入れながら、日本における最も代表的な郁達夫研究者である鈴木正夫氏の研究を取り上げ、それを通じて、日本における郁達夫研究の状況を確認しながら、特に郁達夫の「死」をめぐる論争について再考したい。

### 一 『郁達夫資料』編纂と実証的研究

日本の郁達夫研究において、数十年にわたって、郁達夫の人生と文学の研究に打ち込み、粘り強く独自の探究を行い続けた研究者は、鈴木氏以外には見当たらない。氏自身「『郁達夫—悲劇の時代作家』・あとがき」(研文出版、1994年7月)において、「大学に入学して間もなく、岡崎俊夫訳の郁達夫の短篇小説を何篇か読み、大きな衝撃を受けた。それまで、尾崎一雄、木山捷平、八木義徳などの作品を好んで読んでいたから、中国にもこんな作家がいるのかと新鮮な驚きを覚えたのである<sup>4)</sup>」と述べている。

鈴木氏は、大学院生時代から郁達夫研究に取り組み始め、1966年にはすでに「郁達夫評伝」という論文を書き大学院を修了したが、より多くの人に知られるようになったのは、やはり伊藤虎丸と稲葉昭二による『郁達夫資料』編纂の共編者となり、大きな成果を挙げて以降のことである。それ以来、鈴木氏の郁達夫研究は数十年という長い歳月を費やし、今日までも続く「生涯」の仕事となった。その経緯は、伊藤虎丸の話によると、最初の『郁達夫資料』を「東洋学文献センター叢刊」の一冊として出版することになった機縁は鈴木氏にあった。また、それが最終的に無事世に出たことも、「鈴木氏の熱心と努力と、稲葉氏がその後も倦まずに続けておられた資料収集の成果とによるもの」であったという<sup>5)</sup>。稲葉昭二も4冊目の『郁達夫資料総目録附年譜(上)』「まえがき」で、最初の出版を振り返りながら、当時の若手研究者としての鈴木氏の仕事を次のように高く評価している。「1968年前後から研究上の交流のあった当時大阪市立大学の大学院在学中の鈴木正夫が加わり、1969年10月に東洋学文献センター叢刊第5輯『郁達夫資料』が刊行する運びとなった次第であるが、これはひとえに鈴木氏の熱意と粘りによるものと言って決して過言でない<sup>6)</sup>。伊藤・稲葉両大先輩の前期研究(稲葉昭二・伊藤虎丸『郁達夫研究資料』[油印本、1958年12月]、伊藤虎丸・稲葉昭二「郁達夫研究資料初稿」[『中国文学研究』1号、1961年4月])を基礎にして、鈴木氏は資料全体の編纂を行い、さらに、その発展的な作業、とりわけシンガポール時代の郁達夫資料の調査・収集・整理・考証の点で大きな役割を發揮したといえよう。

日本、中国を問わず、伊藤・稲葉・鈴木三氏による『郁達夫資料』(5冊)はまさしく最初の本格的な郁達夫資料集であった。これは記念碑的な意義を有する。また、それぞれの出版年月を詳しく見ると、資料の1冊目は1969年、2冊目は1973年、3冊目は1974年、4冊目は1989年、最後の5冊目は1990年となっている。少なくとも1-3冊は最も早く出された最初の郁達夫資料集と言えるのである。

中国の場合、1980年代から「中国現代文学史資料彙編」という大きな現代文学史資料整理編纂のプロジェクトが開始され、「郁達夫」もその中に含まれていた。1982年12月、王自立・陳子善編『郁達夫研究資料』(上・下、天津人民出版社)が、中国初の郁達夫資料集として出版されることになっ

た。その編者は、日本の『郁達夫資料』についても言及しており、「日本の伊藤虎丸、稲葉昭二及び鈴木正夫編集の『郁達夫資料』とその補編は、我々への大きな助けになってくれた」ことを「ここでことわり、謝意を表ししなければならない」<sup>7</sup>と記している。ちなみに、近年出版された李杭春など編集『郁達夫研究資料索引（1915-2005）』（浙江大学出版社、2006年12月）では、郁達夫研究資料の整理編纂について、次のような記述がある。「国外では、日本の学者の研究資料に対する重視は、1980年代後期に完成された『郁達夫資料総目録』によっても証明される」<sup>8</sup>。このように、伊藤・稲葉・鈴木三氏の努力による郁達夫資料編纂は先駆的な業績であり、日本の郁達夫研究ばかりか中国における郁達夫研究に対しても大きく寄与することになったのである。

合計5冊の郁達夫資料の詳細を見てみると、(1) 郁達夫作品目録、(2) 郁達夫研究資料目録（中国、日本及びその他）、(3) 郁達夫作品翻訳目録（日本及びその他）、(4) 郁達夫年譜、(5) 関係写真、(6) 附録：①日本留学時代の作品、②兄・郁曼陀年譜及び日本滞在時代の作品、③日本人交友関係資料（回想など）、④雑誌『洪水』などに掲載された文章、⑤1936年の日本・台湾訪問関係資料、⑥シンガポール時代の作品、⑦聞き書き「郁達夫の流亡と失踪」となっており、先駆的業績にもかかわらず、極めて周到で充実した内容構成になっている。

中でも、作品目録、資料目録及び年譜作成は最も基礎的かつ重要なものであり、着実さと粘り強さを要する作業でもある。その点で、この資料集は、すべての郁達夫研究者、中国現代文学研究者にとって貴重な基礎資料となっている。また、郁達夫は一般の中国現代文学作家とは異なり、「いくつかの意味で日本及び日本文学ととりわけ因縁の深い作家」で、日本でなければ資料収集が難しい点、日本人でなければ調査に困難を来す点、「彼と直接に面識のあった人たちがまだかなり多くある今のうちに調べておかなければ、やがて全く解らなくなってしまうことも」多く存在しているため、現在でも、「郁達夫と日本」という分野の研究にとって、本書は欠かせないものとなっており、とりわけ中国の研究者は、本書から多大な恩恵を受けることになったのである<sup>9</sup>。

特に、鈴木氏の独自の調査研究によって郁達夫のシンガポール時代の生活や作品があきらかにされた点、さらに、郁達夫の「死」の真相に関する具体的な証拠が探し出され、かねてから問題となっていた郁達夫の死の真相が初めて明らかになったことは、氏の大きな貢献である。以下、伊藤虎丸と稲葉昭二両氏の言葉を引用しておく。

郁達夫が終戦直後日本憲兵によって殺害されたという胡愈之のレポートについては、わが国では未だ誰もそれを確かめてはいなかった。そこには私たちに一抹の疑問ないしは希望を抱かせるものが残っていたことは確かである。附録Ⅰはこれを確認したものとして、極めて貴重な資料であると考えられる。ここに掲げられた「聞き書き」は10人ほどの人からのものにとどまるが、このために鈴木氏はおそらく100人に近い人々に連絡をとり、南は九州から北は東北まで、よくも、と思うほどに労をいとわず歩いている。この結果は、私たちの主観的な願望に背いて、その日本憲兵による殺害という事実を確認することになったが、彼のこの“執念”としかよべぬような努力は、達夫の死を確認した日本側からの、しかも確実な資料を提供してくれたというだけのことにとどまらず、恐らくは郁達夫の名を知る日本人の心にある、ある種の思いを代表した、この一人の中国作家に対するせめての手向けでもあったであろうと言っただけではいけな

いであろうか。<sup>10</sup>

鈴木が、1971年7月から1年間シンガポールに滞在して、シンガポールやスマトラで現地調査に従事した成果が第18輯「郁達夫資料補篇（上）」（1973年3月）であり、第22輯「郁達夫資

料補篇（下）」（1974年7月）であって、全く鈴木 の 営々たる努力の結晶である。<sup>11</sup>

一方、氏の公表した郁達夫の「死」についての調査結果には最初から疑問ないし非難の見解を持つ日本人以外の研究者も若干はいた。近年になって、この問題は改めて持ち出され、時には激しい論争にまで発展したことも事実である。

郁達夫資料シリーズへの参加、それと関連した長期間にわたる緻密な調査研究は、鈴木氏の郁達夫研究全体に格別の意味を持ち、それが氏の郁達夫研究の最初の成果であると同時に、氏の郁達夫研究そのものを終始貫くものでもあった。

## 二 個々の実証的 案件究明

鈴木氏の郁達夫研究は、『郁達夫資料』シリーズのほか、氏の代表的な研究論文を収録した『郁達夫—悲劇の時代作家』があげられる。本書は新たに書き下ろした導入部分のほか、合計7編の論文（1970年代2編、1980年代4編、1990年代初頭1編）を含み、氏の各段階の主要研究を取めた構成となっている。7編それぞれのテーマは必ずしも統一した構想を持った、いわゆる系統的なものではないが、個々の案件の取り扱い方には統一性が感じられ、氏の研究の特色がよく窺える。それは氏の長ずるところの郁達夫資料収集・整理・考証の堅実さを反映したものである。そこには、漠然とした問題提起ではなく、常に具体的な解決を要する問題点を洗い出し、その問題の周辺・背景を慎重に探り、豊富な資料と根拠を駆使して、実証的手法をもって、問題を究明することで、説得力に富む結論を導くという手法が見られる。

氏の『郁達夫—悲劇の時代作家』は出版された三年後、中国語に翻訳されたが、中国の出版事情もあって、さらにその三年後になってやっと「現代中国文学研究書系第一輯」として、『郁達夫：悲劇的時代作家』（李振声訳、広西教育出版社、2000年6月）という題名で出版された。構想の大きさを好む傾向のある中国の研究者にとっても、氏の詳細な研究に新鮮さを感じたのである。翻訳者である李振声は、次のように自らの感想を漏らしている。「疑わしくないところから疑義を見出し、資料をもってものをいうことは、元々明王朝末期から清王朝初期にかけて生まれた中国学術の命脈を支配する朴学の精神と慣習であったが、しかし、率直に言うと、現在の我々のところでは、それが衰えていることを嘆くしかなくなったが、一方の日本では、それがまさに盛んになっているところ」で、氏の研究は「当時郁達夫の思想に関する信頼性のある資料を検討して推測し、事実に基づいて見解を述べるものである。もしかしたら、結論にはさらなる検討すべき部分があるかもしれないが、考証論述そのものは耳を傾けるに値するであろう」<sup>12</sup>。

伝記的探究への集中が氏の研究の大きな特徴となっている。氏の大学院生時代の修士論文から、後の『郁達夫資料』シリーズ、『郁達夫—悲劇の時代作家』に取められた主要論文及び『スマトラの郁達夫—太平洋戦争と中国作家』（東方書店、1995年5月）は、伝記的な資料収集整理、個々の事柄、問題点の解明に力を注ぎ、豊富な資料を駆使した綿密で丹念な調査・考察作業によって、取り組んだ各課題の解決に大きく貢献したといえよう。

氏の郁達夫資料への幅広いアプローチと内容に対する熟知は、『郁達夫—悲劇の時代作家』の導入部「郁達夫—その生涯と活動」という一文だけからもよく分かる。郁達夫の兄・曼陀が日本留学時代に漢詩人である森槐南（1863-1911）などと交遊があったこと、郁達夫と松井石根（1878-1948）はともに漢詩人である服部担風（1867-1964）との関わりがあること、郁達夫が初めて佐藤春夫と知り合った際の田漢の仲介、上海時代における魯迅との協力の遠因、1936年の訪日のきっかけと松井石

根の関与の可能性<sup>13</sup>等々、いずれも貴重な情報資料提示になっており、とりわけ中国における郁達夫研究者にとっては、有益な情報提示であるばかりか、新しい研究が展開するきっかけとなる重要な手掛かりの提供ともなっている。

「創造社脱退前後」(1976)が発表された当時、中国では、「文化大革命」がまだ終結しておらず、「郁達夫」の名誉も回復されてはいない時代であったが、氏は、郁達夫が広州時代に「北洋軍閥」打倒、中国統一を目標とした「北伐革命」を進めた広州革命政府を批判したこと、「創造社」創始者の一人でありながら「創造社」を脱退したこと、といった「大事件」に注目し、事件の背景、特にその全過程に焦点をあて、多くの関連資料を精査した。その結果、郁達夫の革命政府批判は単なる「暴露」のための暴露でもなく、漠然とした革命政府への感情的な反発でもないことが明らかであり、それは、彼がかつて現代経済学をはじめとした社会科学を系統的に学んだことに関連するもので、当時の中国革命に対する正確かつ醒めた認識であったと結論付けている。今日の見地から見れば、氏の結論にはさらに検討すべき余地があるかもしれないが、しかし、1976年早々、当時の中国が極めて異常な社会的政治的情勢であったことを顧慮すれば、氏の緻密な研究とその結論はまさに「記念碑的」な意義を有するものと言える。『奔流』『大衆文藝』編集時代—魯迅との交渉を中心に(1980)も、「創造社脱退前後」と関連して、郁達夫の魯迅との付き合いに触れつつ、二誌編集時代の活動を細かく整理したものである。

この他、「郭沫若の帰国と郁達夫」(1982)も、研究上の問題点の一つに取り組んだ力作だといえよう。しかし、氏の研究以来、すでに30年の時が経っている。その間、新しい資料や研究が現れ、これまで詳細が不明であった事柄で明らかになったものは少なくない。近年、外務省外交資料館所蔵の公文書の公開によって、1936年の郁達夫の訪日は日本外務省の助成を受けて実現されたことが初めて明らかになった。また、その資料によって、郁達夫の訪日の具体的な日程まで確認できることで多くの疑問が解消されることになった。一方、日本側の助成を受けた訪日の「公式」の日程活動とは別に、これまで議論されてきた郭沫若の帰国への働きかけなどの「使命」があったのかどうかなど、現在でも解明されていない点が多いのも事実である。中国における最新の研究では、郁達夫の訪日と郭沫若の帰国とは関連性がないとする見解が目立っている<sup>14</sup>。しかし、郁達夫の発言に照らし合わせると、そこには大きなずれが生じる。氏の論文は30年前に書かれたものであるが、そこに提示された資料と主張は興味深いもので、現在でも検討に値するものである。氏の論文は、①郁達夫自身の証言、②郁達夫の郭沫若宛の書簡、③郭沫若の長男の証言、④戴国輝氏の推測、⑤氏の結論(特に郭沫若が何らかの意図で郁達夫の役割評価を避ける点)、という点から構成されており、これらは、今日の見地から見ても、なお検証すべき内容を有している。

「文学作品はすべて作家の自叙伝である」(1991)は、よく知られたフランスのアナートル・フランスの言葉に焦点を当て、その精確な出典、使用文脈及び郁達夫の発言との関わりについて、入念な考察を行ったものである。こうした日本人研究者の「得意技」による作業は中国における研究の不十分な点や空白を埋めるのに大きな意義がある。また、どちらかという、壮大で理論的な「研究」が好まれる中国の学界にとって具体的な課題に専念し、緻密な調査・整理・考察を展開させる研究パターンを示してくれることにもなっている。

「陳儀についての覚え書—魯迅、許寿裳、郁達夫との関わりについて」(1989)は、題名にも示されているように、浙江省出身の文化人・文学者との関わりが多い、中華民国史上の重要人物である陳儀を取り上げたものである。この論文では、氏が長年に渡って集めてきた資料を公表し、政治、歴史、中日関係、文学史、個別の文学者などにわたる多様な資料情報を読者に提供してくれる。

『郁達夫—悲劇の時代作家』以後の新しい研究成果の中では、「郁達夫と佐藤春夫—佐藤春夫の放

送原稿「旧友に呼びかける」に即して一」（『横浜市立大学論叢』人文科学系列第53巻第1・2合併号、2002年）<sup>15</sup>が非常に重要なものと言えよう。この論文は、既存の研究でしばしば取り上げられてきた郁達夫と佐藤春夫の関係を考察対象としながらも、これまで知られておらず、当然扱われることもなかった佐藤春夫の放送原稿「旧友に呼びかける」を取り上げ、資料の紹介考証と問題探究を行っている。氏は、郁達夫が「アジアの子」（『日本評論』1938年3月号）を読んで激怒し「日本の娼婦和文士」（『抗戦文藝』第1巻第4期、1938年5月）が書かれたことを、佐藤は最後まで知らなかったのではと分析している。さらに、佐藤の放送原稿には、郁達夫らとの友情を信じ、彼らに古い友情を思い出してほしいというような感動的な部分があるように見えるが、佐藤自身の戦争協力への「責任意識」、甚大な戦争被害にあった「中国人への贖罪の観念」、自らの過去の行為で郁達夫らの心を傷つけたことへの「自覚」が決定的に欠如している点を指摘し、「国家、民族の存亡を懸けて闘っていた抗戦相手中国人への認識不足」は佐藤一人ではなく、「多くの日本人の通弊であるのかもしれない」という点を論じている。全体として、新しく紹介された資料に対する氏の鋭い分析指摘は非常に印象的である。

以上のほか、氏は各種の雑誌や新聞紙上に数多くの研究ノート、訪問記、見聞記、紹介文、書評も発表している。「『温梓川と郁達夫』余話」（『中国文藝研究会会報』第146号、1993年12月）、「銅像になった郁達夫」（『中国文藝研究会会報』第150号、1994年3月）、「夏衍と郁達夫」（『中国文藝研究会会報』第163号、1995年5月）、「『スマトラの郁達夫』をめぐって」（『中国学志』泰号、1996年12月）、「郁達夫の死の一因」（『中国文藝研究会会報』第186号、1997年4月）、「雑誌『自然』と中国文人たち（上）（下）」（『中国文藝研究会会報』第192、193号、1997年10、11月）、「敗戦日本と蒋介石」（『史』第99号、1999年3月）、「郁達夫記念碑建立顛末記」（『中国文藝研究会会報』第203号、1998年9月）等である。こうした氏による郁達夫関連情報についての論考がまとめられ本の形になれば、郁達夫研究者にとってたいへん有益なものになるだろう。

### 三 郁達夫の「死」をめぐる調査研究

鈴木氏の郁達夫研究において、郁達夫の「死」の真相についての調査・研究は極めて重大な事項であった。また事件そのものの重大性によって、氏の研究はこれまで日本と中国の研究者、関係者からも注目され、文学研究の次元を超えた論争も生じるようになった。

鈴木氏は約半世紀も前から、郁達夫の失踪に関する調査に着手し始め、1968年、『郁達夫資料』の一冊目である『郁達夫資料—作品目録・参考資料目録及び年譜—』（「附録」「聞き書き・“郁達夫の流亡と失踪”」）、1971-72年に、「南洋に消えた郁達夫」（ペンネーム「今西健夫」、『南十字星』1971年11・12月号、1972年3・4月号、5・6月号。孫歌訳5・6月号は「消失於南洋的郁達夫—一位中国作家的最後」、北京：『新文学史料』1984年第2期）、1973年に、三冊目の『郁達夫資料補篇（下）』（「附録」「聞き書き・“郁達夫の流亡と失踪”補遺」）、1986年に、「郁達夫被害真相」（北京：『新文学史料』1986年第1期）を発表し、1995年に、著書『スマトラの郁達夫—太平洋戦争と中国作家』（東方書店。翌年、中国語に翻訳された。李振声訳『蘇門答臘的郁達夫』、上海：遠東出版社、1996年6月）を出版した。この一連の論文、発表、著書によって、郁達夫の「死」についての氏による各段階及び最終的な調査・研究結果が公開された。特筆すべきは、氏が多くの関係者を訪ね、聞き取りなどの調査を行い、さらに根気強く最も肝心な当事者に自供をするように働きかけた末、以下の点が明らかになったことである。すなわち、これまで長く参照されてきた「胡愈之説」などと違って、郁達夫は1945年8月29日の深夜か30日の未明に数名の日本憲兵によって殺害されたということであ

る。

氏は、この調査研究に取り組む最初のきっかけを次のように語っている。長い間、影響の大きかった、胡愈之「郁達夫的流亡和失踪」（『星洲日報』1946年8月31日、9月5、7日。週刊『民主』第48、49、50期〔1946年9月14、21、28日〕にも掲載された）に「述べられている郁達夫の失踪が真に日本人と関係あるものかどうかを日本人の手で明らかにする必要があると考えていた」。

そこで機会があれば、郁達夫とスマトラで接触した日本人を探してみたいという希望はかねてより抱いていたが、調査が至難であり、あまり成果も期待できないものと思ひ込み実行に移さずにいた。ところが今回この資料を作成中に偶々、かつてスマトラで陸軍の司政官をしていた人との面識を得、その人の記憶を手掛かりに、次々と脈絡をたどって、探索を続けたところ、全く思いがけなく、趙廉（郁達夫）とスマトラで極めて親しくしていた、あるいはかなり頻繁に接触のあったという数名の人を探してあてることができた。そしてそれら関係者と面談することによって（一部は手紙と電話）達夫のスマトラでの生活がかなり明瞭になり、戦後の彼の失踪についても決定的事実を知りえた。（『郁達夫資料—作品目録・参考資料目録及び年譜—』91頁、1969年）

当時、伊藤虎丸は、氏の調査作業について、「達夫の死を確認した日本側からの唯一の、しかも確実な資料を提供してくれたというだけのことに止まらず、おそらく郁達夫の名を知る日本人の心にある、ある種の思いを代表した、この一人の中国作家に対するせめてもの手向けでもあったであろうと言っはいけないであろうか」<sup>16</sup>と、関係者たちの仕事が郁達夫への慰めあるいは鎮魂だという思いを代言している。

稲葉昭二も自分たちが、かつて日本から大きな被害を受けてきた中国の人々に対して罪を反省し、罪を償う思いを抱いて、『郁達夫資料』の編纂にあたったことを痛ましい思いを込めて披瀝している。少し長いものであるが、そのまま抄録しておく。

（資料の調査・整理が）進むにつれて、故人郁達夫のみならず、母堂も長兄もまた帝国主義日本の中国侵略の犠牲となられ、特に母堂が、達夫の〈自伝〉にも鮮やかに描かれている風光明媚な富陽の鶴山にあった郁曼陀邸で、日本軍の砲撃下に落命されたといった事実が確かになってきたことは、正直なところ、あらためて、わたくしたちをして言葉を失なわしめるものであった。（郁達夫の母は富陽が日本軍に進攻を受ける時、餓死して果てた。当時、編者伊藤・稲葉・鈴木諸氏はその事情を知らなかったという—李注）

思えば、一世代若い鈴木は別として、伊藤・稲葉の両名は、その祖国日本が正に侵略戦争を遂行しつつあった最中に少年期を過ごし、是非善悪もわきまえず、中国に対して心の中にせよ銃を持ったことが一再ならずあったことを、率直に認めなければならない。—私たちは、この日本に生を享ける者として、ただ郁氏のご家族にとどまらず、犠牲となられた幾百千万の中国の人たちに、限りない債務を感じ、そのことへの痛切な反省の上に立って、僅かな個人の方でできるささやかな償いの一つとして本資料の編集に従事してきた。（『郁達夫資料補篇（下）』239頁、1974年）

当時、「一世代若い」鈴木氏は、1971-72の一年間、シンガポールに滞在する機会を得て、公務の傍ら、郁達夫のシンガポール時代の作品や未見資料の探索収集に力を注いだ。その結果は「シンガ



ボール時代の作品」にまとめられ、『郁達夫資料補篇（下）』に収録されることになった。氏は、その「まえがき」で、先輩の伊藤・稲葉両氏と同じように、懸命に郁達夫資料収集に取り組む原動力の所在を語っている。

「郁達夫資料」の附録で明らかにしたように、郁達夫は終戦直後日本の憲兵の手によって、この世から葬り去られた。それからすでに30年近い歳月が経過したが、いま我々日本人の手によって、たとえ雑文の類にしろ、埋もれていた彼の晩年の作品を再び世に送ることが、何程かの贖罪になりうれば、我々にとってこれにすぐる喜びはない。

本篇の郁達夫の作品には、日本軍国主義に対する厳しい指弾が少なくない。読んで改めて襟を直す思いに駆られる。再び不幸を繰り返さぬためには、我々は日本が中国を侵略していた当時、郁達夫がおそらく満腔の憤りをもってかいたであろうこれらの作品を、苦汁を飲み下す思いで虚心に読まねばならないであろう。最後にそうした気持ちで読んでくれる日本人が一人でも多いことを切望し、まえがきに代えたい。（『郁達夫資料補篇（下）』3頁、1974年）

約半世紀前、伊藤・稲葉・鈴木がどういうきっかけ、どういう気持ちで当時「人気学問」でもない郁達夫研究、特に極めて労力と時間を要する郁達夫資料収集・編集の取り組みを決意したか、さらにどのように長期間にわたって粘り強くそれを続けたかということが見て取れる。これは彼らにとっての一つの「原点」であり、我々が忘れてはならないことである。

資料の二冊目で伊藤虎丸も触れているが、1969年、鈴木氏の調査結果が資料の一冊目に発表された後、日本および国外からも反響があった。しかし、中国大陸では、当時ちょうど「文化大革命」の最中で、至る所「革命闘争」一色であり、とても普通の社会状態といえる状況ではなかった。当然ながら、日本のこうした郁達夫研究の動向も中国の研究者、読者の目には届かなかった。日本の場合、郁達夫資料の出版は『読売新聞』『朝日新聞』『北海道新聞』などにも紹介され評価されたのに対し、中国語圏の台湾、香港、シンガポールからの反響には、誤解あるいは非難も存在した<sup>17</sup>。

1980年代から、中国の「改革開放」時代の到来に伴い、鈴木氏の郁達夫調査・研究、とりわけ郁達夫の死に関する報告は、中国の学術界や研究者に知られるようになり、大きな反響を引き起こした。1985年9月17日、氏は「著名作家郁達夫烈士殉難40周年学術討論会」（浙江省富陽市）に出席し、「郁達夫被害真相」を題とした発表を行い、出席者からの注目と関心を集めた。その結果、大会の主催者からの要請を受けて、22日に二回目の報告発表を行った。後に、その発表内容が中国の雑誌『新文学史料』1986年第1期（1986年2月）及びシンガポールの新聞『聯合早報・星期副刊』（1986年1月26日）に掲載された。それ以後、官民を問わず、氏の調査結果は受け入れられるようになった。それに関する記事報道は膨大な数になるが、主なものをいくつかあげておこう。

中国最大の政府系国営通信社「新華社」による「1985年9月27日新華社報道」

現代著名作家である郁達夫が日本憲兵によって殺害されたことは、すでに日本人学者の鈴木正夫が収集した第一次資料によって裏付けられた。日本の横浜市立大学助教授である鈴木正夫は早くも1966年から郁達夫の南洋における流亡生活研究に取り掛かり、大量の資料調査に続き、シンガポールやインドネシアのスマトラなどへも赴き、実地調査を行い、前後あわせて百人以上の日本人関係者を訪ねた。最近、種々の努力の結果、氏は当時郁達夫殺害の命令を下した日本憲兵班長をつきとめた。その憲兵班長が自ら郁達夫殺害の命令を下したこと認めため、郁達夫が日本憲兵の手によって殺害されたという推測は裏付けられることになった。<sup>18</sup>

さらに、中国共産党の機関紙ともいえる『人民日報』をはじめ、数多くの新聞紙、雑誌などのマスメディアによって報道・掲載された。賈越「記念郁達夫殉難四十周年學術討論會綜述」では、「日本人学者鈴木正夫の発表した『郁達夫被害真相』によって、郁達夫が日本憲兵に殺害された事実は証明された」<sup>19</sup>と紹介している。

郁達夫の親族も鈴木氏の調査研究結果を受け入れ、そしてその内容に信頼を置いていた。氏の1985年における「真相」発表の前においても、『郁達夫資料』に収録された「聞き書き・“郁達夫の流亡と失踪”」は、すでにその実子である郁雲（郁達夫と王映霞との間の二男）の手になる『郁達夫伝』（福建人民出版社、1984年4月初版）に、父親の「結末」を語る有力証拠として引用されている。長男の郁飛も、「關於郁達夫の死難真相」では、父郁達夫の死に関しては、胡愈之報告以後、「20年以上の間に、既成の説を補う、もしくは否定になる新しい資料は一切なかった。1969年の東京大学東洋文化研究所東洋学文献センター叢刊第五輯『郁達夫資料』の出版は、郁達夫の死が確かにスマトラの日本憲兵の犯行によるものを証明できる資料となった」と述べ、鈴木氏の「学者の徹底的に追及する姿勢」、「あまり（中国の一季注）人々に知られず、利用されていない」「苦勞して得た成果」を称えている<sup>20</sup>。特に、郁達夫の姪で、中国の美術界文化界で高く評価される画家の郁風（1916-2007）は、氏の郁達夫調査研究を高く評価している。彼女は、自ら編集した『郁達夫海外文集』（北京：生活・読書・新知三聯書店、1990年）の「あとがき」に当たる「郁達夫—蓋棺定論的晩年」で、かなりの紙面を割いて鈴木氏の調査研究を論じている。

（新中国一季注。以下同）建国後、これ（「中華文芸界抗敵協會」）をもとに設立された中国文联と中国作家協會は、郁達夫のような、抗日戦争中に直接敵に殺害され、殉難した作家に対して、調査もせず、何の意思表示もしなかった。たまたま文藝界の批判文に郁達夫という名が出てきたことを除けば、彼は読者の視野から消えてしまった。改革開放以後の（19）80年代から、ようやく彼の著作が出版できるようになった。しかし、彼の死に対するきちんとした調査は、日本の学者しか行っていなかったのである。

郁達夫晩年の作品の収集を続けるため、さらに彼の死因を究明するために、鈴木はシンガポールやインドネシアなどの郁達夫が逃れ移った地域へ渡り、一年以上の時間を費やし、百人以上の関係人物にインタビューをし、彼の海外で発表した作品や関係資料を探し集め、1973、74年に、それぞれ『郁達夫資料補篇』上下二冊を出した。この三冊は、この十数年以来、すでに海内外の郁達夫研究、特に彼の晩年を研究する主要な資料となっている。

その間、海外、特に香港と台北においては、郁達夫の死に関して様々な説が存在した。日本の憲兵による殺害のほか、中国人あるいはインドネシア共産党による暗殺説も現れた。1988年になっても、ある人は香港の『大成』という雑誌に文章を掲載し、インドネシアへ旅行に行ったとき、スマトラのメダンの華僑から、郁達夫は王任叔に裏切られて死んだと聞いたという。これは当然でたらめな話である。

1985年9月、中国の郁達夫殉難40周年學術討論会からの招きを受けて、鈴木は郁達夫の故郷である浙江富陽で開催された大会に出席し、はじめて確たる証拠をもって郁達夫が日本の憲兵によって密かに殺害された報告を公に発表した。これで、40年を経て、郁達夫の死の真相が遂に明らかになり、事実は確定した。<sup>21</sup>

鈴木氏の粘り強い努力及びその調査結果に対しては、親族以外の重要な関係者や学術界からも敬意と好意が示され、高く評価されている。周知のように、中国では、郁達夫の日本憲兵殺害説をいち早く公表したのは、胡愈之の「郁達夫的流亡和失踪」であった。胡愈之（1896-1986）は、著名な社会活動家、政治家、学者であると同時に、郁達夫の友人でもあった。彼も、当時鈴木氏の郁達夫の死に関する調査研究を知り、その調査に対して非常に期待し、かつ評価する様子を見せた。こうした事情は、中国現代文学の研究者で、中国初の『郁達夫研究資料』編者の一人である陳子善の回想文「一個後輩的懷念」中に詳細に記されている。

胡愈之の長編報告「郁達夫的流亡和失踪」は、数多くの確実な事実根拠をもってはじめて郁達夫の失踪の謎を明らかにし、郁達夫研究史において重要な地位を占める。しかし、当時の客観的条件による限界もあって、この報告には不十分な部分があった。報告では、郁達夫は1945年8月29日夜に行方不明になって、9月17日に殺害されたとされるが、当時、日本側はすでに降伏を宣言した状況にあったため、郁達夫を半月以上監禁し続けてから、彼を殺害したという可能性は高くはないと考えられる。そのことから、私は郁達夫が命を落としたのは1945年9月17日であるという説に対して、疑問を感じていた。1983年後半、日本の有名な郁達夫研究者である鈴木正夫さんが復旦大学を訪問した機会を利用し、鈴木さんと何度もこのことについて意見交換を行った。鈴木さんからは、すでに当時郁達夫殺害の命令を出した日本憲兵隊の責任者を突き止め、ポイントとなる証拠も入手したが、ただし、その人物はまだ公に事実を認めるに至っていない、と知らされた。このニュースは非常に重要で、私はすぐさま胡愈之氏及び郁達夫のもう一人の親友である楼適夷氏に報告の手紙を出した。翌年の夏、楼適夷氏が上海に来られ、胡愈之からの伝言があるので、会いに来てくれないかとの電話があった。私は楼適夷氏の宿泊所に駆けつけ、胡愈之氏からの手紙を読んだ。そこで初めて私は以下の事情を知ることになった。胡愈之氏が郁達夫の死の真相について強い関心を抱いていたこと、私の送った手紙を楼適夷氏にも転送したこと、さらには、郁達夫が日本憲兵によって殺害されたことを固く信じるが、しかし、それは郁達夫殺害のより詳細な経過を我々が追及することの妨げにならないこと、日本に帰国した鈴木さんと連絡を保ち、鈴木さんがその有利な条件を生かし、郁達夫の死の真相を徹底的に解明することを促すよう、楼適夷氏を通じて私に伝えてほしいとのことであった。胡愈之氏は、日本の学者及び私の見解がご自分の報告と異なったことには、まったく不快感もなく、事実を尊重し、論争も歓迎し、実際の行動を持って学術の自由を主張していた。私は、彼のこうした寛容で開けた態度に感動を覚えた。

そこで、私は胡愈之の依頼に従って、鈴木さんとの文通で何度もこのことに触れ、彼がより一層調査に励むよう頼んだ。鈴木さんは努力を重ねて、とうとうその憲兵の責任者を説得し、自分が命令を下し、1945年8月29日夜もしくは30日未明に秘かに郁達夫を拉致したうえ殺害したことを認めさせた。1985年9月、鈴木さんの調査報告は富陽での郁達夫学術討論会で発表され、国内国外から大きな反響が起きた。会議後、私は鈴木さんの調査報告の中国語版整理に協力し、私たちと喜びを分かちてもらいたいと思い、それを胡愈之氏に郵送した。<sup>22</sup>

中国の学術界においても、鈴木氏の調査研究を高く評価するものは多い。戦前に日本への留学経験を持つ作家、翻訳家、かつ著名な中国現代文学研究者で、当時復旦大学教授であった賈植芳（1915-2008）は、鈴木氏の『スマトラの郁達夫——太平洋戦争と中国作家』の中国語翻訳版に、「一份發人深省的歷史實錄——『蘇門答臘的郁達夫』中訳本序言」を書いている。その中で、氏のこの

調査報告に対して、この一冊が、「初めて事件の全ての経過を詳細に公表し」、「郁達夫殺害の期日に関する様々な風説のほか、次々に誤りを重ねてきた説に対しても一つ一つ事実を解明し、最終的にこの半世紀以上にわたる歴史的懸案にとって、信頼できる歴史的な結論を出し」、「極めて文献的価値に富む証拠を提供してくれた」「内容が豊富で資料が詳細かつ充実した歴史記録」であると、高い評価を与えている<sup>23</sup>。郷土作家郁達夫に対して、敬愛の念を持ってその伝記研究に努めてきた浙江省の郁達夫研究者も鈴木氏の調査研究を評価していた。その一人である蔣増福は、1996年に開催された郁達夫生誕百周年記念大会の様子を紹介した「検閲新成果的又一次盛会——郁達夫研究国際学術討論会述評」で、「11年前、日本の郁達夫研究専門家である鈴木正夫氏は、中国（富陽）の講壇で、『郁達夫被害真相』を題として、初めて彼の長期にわたる調査研究の結果を世間に発表し、中国の学界で好評を受けた。今回の大会での講演は二度目となり、それで氏が引き続きその課題を取り組み続けていることが分かった」<sup>24</sup>と述べている。

以上のように、鈴木氏の1985年での郁達夫被害真相発表から2004年までの約20年間、氏の調査報告は幅広く受け入れられ、ある意味、この件には決着がついたといえるほどであった。しかし、2004年に、一冊の郁達夫伝記（羅以民『天涯孤舟——郁達夫伝』、杭州：杭州出版社、2004年3月初版）が出版され、事態は大きく揺れ動くことになった。

羅以民『天涯孤舟——郁達夫伝』（以下は、『天涯孤舟』）を略称する）「第五章 郁達夫失踪之謎？」の「第六節 日本憲兵謀殺郁達夫原因新探」と「第七節 質疑鈴木正夫」は、郁達夫の失踪と死の真相に関する鈴木氏の調査結果（『スマトラの郁達夫—太平洋戦争と中国作家』）に対して、否定的な見解を示すものであった。その中心的論旨は、次の二点である。第一に、郁達夫殺害の命令を下した元憲兵D、及びその他のアルファベットで記された元憲兵やその遺族は虚構であること、第二に、それに関連して、郁達夫を殺害した犯人はDではなく、「日本憲兵のある上層の人物である」こと、である<sup>25</sup>。以下、やや長いものにはなるが、羅氏『天涯孤舟』「第五章 郁達夫失踪之謎？」「第七節 質疑鈴木正夫」の肝心な箇所をそのまま引用しておこう。

日本の鈴木正夫氏は、数多くの貴重な資料を収集して、郁達夫研究に多大な貢献を行った。しかし、彼の『スマトラの郁達夫』に書かれた第二次世界大戦中にスマトラで服役していた「憲兵班長D」が郁達夫を謀殺したという説は到底信じられない。

1985年9月、鈴木正夫は、中国の富陽での「著名作家郁達夫烈士殉難四十周年記念学術討論会」において、「学術報告」を行った。1995年、『スマトラの郁達夫』の日本語版が出版されたが、鈴木正夫は今日まで依然として自らの結論を堅持している。しかし、いわゆる証言はいくら完璧精緻であろうと、その証人の存在が証明できないのなら、それはあくまでもでたらめなものでしかないだろう。鈴木正夫の「学術報告」は実に「学術的」ではない。「憲兵班長Dが確かに存在する」ことが明らかにされず、さらに彼自ら書面でこういうことを確かにやったと認めない以上、彼が二人の憲兵に命令を下して郁達夫を殺害させたことを認定したことは、歴史的にみて極めて荒唐無稽なことなのだ。なぜなら、鈴木正夫は何の証拠も出せないからだ。世界中に証人のない証言を採用する裁判所はどこにもないだろうし、証人のない証言でどうやってある人が有罪と判定できるのか。Dの証言は実に犯行の動機説明に欠けるだけでなく、犯行の時間と場所さえはっきりしないのだ。

民族の感情からすると、私は鈴木正夫の結論を受け入れたいのだが、しかし、歴史学をやるものの良心と学術的立場から、私は決して鈴木正夫の結論に賛同できないのだ。そうであれば、

誰でも鈴木正夫個人の言い分をもっともう一つの第二次世界大戦史が書けるのだ。筆者は、このような憂慮さえ抱いている。もし現在筆者がこういう質疑を出さなければ、中国の歴史界はもっとひどい皮肉にさらされてしまうだろう。この18年間、中国では、なぜ鈴木正夫の結論に疑問を抱く者がいなかったのだろうか！

その本では、鈴木正夫は6個のアルファベットを用いて、当時彼が取材した6名のスマトラの憲兵の本名に代えている。Yの妹は憲兵でもないのに、本当の名前が書かれていない。その目的は明確なのだ。人々に「憲兵班長D」を探しあてられないようにするためである。なぜならそのうちのどの元憲兵の一人であろうと憲兵の妹であろうと探し出せば、すぐにも憲兵班長が誰であるか確認できるからである。

18年来のこうした現象は一つの可能性のみを示している。それは鈴木正夫の書いた憲兵班長D及びA、B、C、EとYの妹はすべて虚構である。もともと彼らは存在しないのだから、一人も彼の関連の記述を否認もできれば、支持もできないのである。鈴木正夫がDの存在がしばらく提示できなくとも、少なくとも関連する人々の存在を提示すべきだが、残念ながら、18年来中国の読者は何も得るところがないのである。<sup>26</sup>

羅氏の異論や批判に関しては、少なくとも以下のいくつかの点が指摘できる。第一に、鈴木氏の調査報告が発表されてからの18年間、郁達夫の親族友人、胡愈之のような重要な当事者、作家と研究者はその調査結果を受け入れてきた。この点は、謙虚に重く受け止めるべきであろう。郁達夫の姪である郁風が嘆いたように、中国国内では、長い間郁達夫の死の真相究明は十分に行われてきてはおらず、非常に残念な状態ではなかった。「彼の死に対するきちんとした調査は、日本の学者しか行っていなかった」<sup>27</sup>という点は心すべきであろう。第二に、日本人研究者として、数十年にわたって、熱心に中国文学の研究と教育に取り組み、何よりも誠実な使命感を抱いて、中国の研究者も行っていない郁達夫の死の真相追及を続けてきたことを理解せずに「大胆」な「推測」に急いだ点は、評価できない。第三に、学術研究の角度から見ても、鈴木氏の調査報告が「虚構」であること、郁達夫が日本憲兵のある上層の人物によって謀殺されたことなどは、あくまでも主観的判断にすぎず、事実を示す資料なり、根拠なりが示さなければならない。第四に、羅氏が郁達夫研究の専門家及び日本研究の専門家でないことに加え、特に「疑問」と「新見解」を呈した郁達夫の死の真相についても、自分なりの調査・研究を行ってもいないようなことから、常識に外れる「判断」「論述」などが少なくない。

このように、急に「論争」まで発展してきた日中の見解の違いに関しては、郁達夫文学や郁達夫の死に関心を抱く中国の郁達夫愛読者からのコメントは非常に興味深く、以下、そのまま引用しておく。

我々が鈴木正夫の結論を信用したのは、次のような理由からである。

一、氏の結論には、証言と証人がある。特に、氏は郁達夫殺害の首謀（憲兵班長であるDという人物）がまだ健在であったことで、その本人を突き止めた。彼の手によって書かれた「自供状」は当然信頼できるであろう。一方の胡愈之の報告は、当時の聯軍総部情報処から得た情報によるものだが、当時聴取された当事者の自供は一切公表されておらず、直接的な証拠に乏しく、したがって、その信用性は完全には証明されていない。

二、鈴木正夫は事実に忠実で、良識のある日本学者であり、氏の真面目さと粘り強さは敬服すべきである。さらに、日本の学者が郁達夫の死の謎を解明してくれたことは当然すばらしいことであるし、我々中国人は彼に感謝しなければならない。<sup>28</sup>

さらに、上述の「郁達夫之死」にも、次のような鋭い指摘がある。「この本で、羅以民は、“郁達夫の死が日本憲兵のある上層人物による可能性が極めて高い”ということに対して、何の証拠も出していない。“可能”は“真実”ではない。羅以民が確たる証拠を示さない限り、まさに彼が鈴木正夫に求めているように、人々は彼の判断を“一つの推測”にすぎないと見なさざるを得ないのである。」<sup>29</sup>もう一人の「魯迪」という人は、その「歴史的真実記録—記鈴木正夫教授兼評『蘇門答臘的郁達夫』」で、かつて自らの鈴木氏とのささやかな関わりに触れながら、氏の調査研究を論じている。

(鈴木正夫は一季注)「日本人の一人として、愛読者の一人として、鎮魂の念を込めて」、この25年も要した本を完成させた。本書はこれまでのところ中国内外における、郁達夫の南洋での実際の生活ぶりや殺害の真相を語る、最も詳細で正確な本なのである。25年、人間の生涯には、いくつの25年が数えられるのか。ある中国人作家の生涯の最後の数年を研究するために、25年の歳月を費やしたことだけでも、私は鈴木先生への尊敬の念を禁じ得ない。

鈴木先生は、真相を明らかにした後、本の最後に、「日本人が引き起こした戦争が、郁達夫の悲惨な横死をもたらした。彼の死は日本人に永遠の罪過を負わせるものとなったのである」と記している。かつて鈴木先生と多少の交流のあった普通の中国文学関係者として、はるかに遠い日本におられる鈴木先生に尊敬の念を表したい。彼は、真摯で誠実な学者なのである。彼のこの本は、歴史の真実の記録なのである。<sup>30</sup>

意外にも、ネットに穏やかで客観的に物事を見る人が存在していたことは、筆者の予想を超えたものであった。

郁達夫の死をめぐる一連の騒動によって、様々なことが浮き彫りになった。中国と日本の人々の間、中日の研究者の間の真の相互理解実現のためには、なお多くの課題が残されている。しかし、両国の人々の努力も続いており、中国社会全体の変革も進行中であって、未来は期待できると信じたい。

## 注

- 1 筆者は、中国最大の学術研究論文データベース『中国学術期刊網』を利用して、調査・統計を行なった。刊行物については、李杭春・呉秀明・盤劍主編『郁達夫研究資料索引(1915-2005)』(杭州：浙江大学出版社、2006年)、劉茂海「新時期以来郁達夫其人其作研究総述」(蘭州：『西北第二民族学院学報』2007年第1期)を参照されたい。
- 2 明治後期から大正・昭和期を代表する漢詩人である服部担風(愛知県出身、名は轍、字は子雲、号は担風・藍亭)は、大正10年(1921)に雅声社を開き、漢詩作詩の指導に携わる。『雅声』はその雅声社の刊行物で、主に当社のメンバー及び他の関係者の作品を掲載するものである。
- 3 この論文は、後に加筆され、題名も「郁達夫と大正文学—日本文学との関係からみた郁達夫の思想=方法について—」に改められて、伊藤虎丸等編『近代文学における中国と日本』(東京：

- 汲古書院、1986年10月)に収録された。これは日本の郁達夫研究において初めての本格的な科学研究成果であると評価されている(大久保洋子「郁達夫小説研究在日本」(北京:『中国現代文学研究叢刊』2005年第5期)を参照せよ)。
- 4 現在、香港の嶺南大学で教鞭をとる許子東氏は、1980年前半の華東師範大学中文系大学院生・同中文系教員時代に、郁達夫研究の新進研究者として頭角を現し、注目を受けた。氏はその最初の研究書『郁達夫新論』(杭州:浙江文藝出版社、1984年1月)において、初めて郁達夫の小説に触れた時にたいへんな衝撃を受けたことを記している。
  - 5 伊藤虎丸「まえがき」(1969.8)、伊藤虎丸・稲葉昭二・鈴木正夫編『郁達夫資料—作品目録・参考資料目録及び年譜—』、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、昭和44(1969)年10月。
  - 6 稲葉昭二「まえがき」(1988.12)、伊藤虎丸・稲葉昭二・鈴木正夫編『郁達夫資料総目録附年譜(上)』、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、平成元(1989)年3月。
  - 7 編者「編後記」、王自立・陳子善編『郁達夫研究資料』(下)、天津:天津人民出版社、1982年12月、963頁。「日本伊藤虎丸、稲叶昭二和鈴木正夫先生编辑的《郁达夫资料》及其补编,给了我们很多帮助」,「也应在此说明并表示谢忱。」
  - 8 同索引1頁を参照。「在国外,日本学者对于研究资料的重视,亦能在80年代后期完成的《郁达夫资料总目录》上得到证明。」
  - 9 これはまた、伊藤・稲葉が最初にこの資料収集・作成に取り組んだ理由ともなっている。伊藤虎丸「まえがき」(1969.8)参照。
  - 10 伊藤虎丸「まえがき」(1969.8)、同前『郁達夫資料—作品目録・参考資料目録及び年譜—』、5頁。
  - 11 稲葉昭二「まえがき」(1988.12)、『郁達夫資料総目録附年譜(上)』、1989年3月、3頁。
  - 12 李振声「『訳跋』」、『郁達夫:悲劇性的時代作家』(広西教育出版社、2000年6月)188-189頁。
  - 13 先般、筆者は、現在「アジア歴史資料センター」によって公開が進められている「外務省外交資料館」などの所蔵公文書に対して、調査・確認作業を行い、「郁達夫1936年訪日新史料—近年日本外務省解密官方档案考」(上海:『現代中文学刊』、2011年5期)を発表した。この論考によって、郁達夫の訪日は外務省の「東方文化事業」助成を受けて実現されたことが明確になったが、しかし、その助成申請の最初のきっかけが一体どんなものであったかは、不明であった。現在のところ、有力な手がかりはなく、前後の状況から推測することしかできない。筆者は、郁達夫が何らかの形で助成の情報を知って、自ら申し込んだか、あるいは日本側から誘われたか、のどちらかになると考えているが、鈴木氏の提示した手掛かりを見ると、松井石根にも関与の可能性があったと考えても無理がないのではないかと思う。
  - 14 廖久明「郁達夫1936年底的日本之行与郭沫若帰国関係考」(北京:『中国現代文学研究叢刊』2010年第2期)は、問題考察の結論として、「今回、郁達夫が日本に行く目的は、命を奉じて郭沫若を帰国させることではない。それは日本を訪れ、郭沫若に会ってからその場で提起されたものである」と主張している。
  - 15 当該論文内容の簡略紹介は、「郁達夫と日本人作家2件」((一)郁達夫と佐藤春夫、(二)郁達夫と大江健三郎)というタイトルで、『中国文芸研究会会報』247号(2002年5月)にも掲載されている。
  - 16 『郁達夫資料—作品目録・参考資料目録及び年譜—』5頁。
  - 17 伊藤虎丸「まえがき」に言及されたものは、以下の通りである。杜国清訳「郁達夫の流亡和失

踪」(台北：『純文学』49号)、梅其瑞 (Gary Melyan)「郁達夫遇害之謎」(香港：『明報月刊』5卷11、12号)、孺子牛「郁達夫的『生死之謎』」(シンガポール：『國際時報』3卷9、10期)、郁青山「也談郁達夫之死」(シンガポール：『星洲日報』1971年3月8日)等。『郁達夫資料補篇(上)』を参照せよ。

18 新華社通信の報道原文は以下の通りである。

1985年9月27日，新华社报道：现代著名作家郁达夫被日本宪兵杀害之事已从日本学者铃木正夫收集的第一手资料得到证实。日本横浜市立大学副教授铃木正夫早在1966年，他就开始了对郁达夫南洋流亡生活的研究。在查阅了大量资料后又到新加坡、印度尼西亚的苏门答腊等地作调查，先后寻访了上百名了解情况的日本人士。前不久，铃木正夫经过种种努力，终于找到了当年下令杀害郁达夫的日本宪兵班长。这名宪兵班长承认，是他下达了杀害郁达夫的命令，从而证实了郁达夫被日本宪兵杀害的推测。

19 杭州：『浙江社会科学』1986年第1期。

“日本学者郁达夫发表了《郁达夫被害真相》，使郁达夫遭日本宪兵杀害的事实得到了证实。”

20 郁飛：『新郷師範学院学報』1985年第1期。最初は、香港の月刊誌『華人』1984年11月号に掲載された。

“这则噩耗虽然胡愈之声明‘不够完全’在先，此后二十多年间，竟没有得到任何新材料的补充或否定，直到1969年东京大学东洋文化研究所的东洋学文献中心丛刊第五辑《郁达夫资料》出版，才有了新的材料进一步证实此案确系苏岛的日本害（“宪”の誤植—李注）兵所犯。”

21 “建国以后在这基础上成立的中国文联和中国作家协会，对于郁达夫这样的作家，在抗日战争中直接被敌人杀害殉难，既未调查，也没有任何表示。除了偶然在文艺批判文章中出现郁达夫的名字之外，他已从读者中消失了。直到改革开放后的80年代才重新出版他的著作，而对于他的死的认真调查，倒是全靠日本学者在做。”

“为了继续搜集郁达夫晚期作品并考察其死因，铃木于1971年前往新加坡和印尼郁达夫流亡地区，历时一年多，采访了数以百计的有关人物，搜集了海外作品和资料，于1973年和1974年陆续出版了《郁达夫资料补篇》上下二册。这三本书近十余年来已成为海内外研究郁达夫特别是研究他的晚期的主要资料。

这期间在海外，特别是香港和台北，对于郁达夫之死有不少传说，除了说被日本宪兵队杀害，还有的说是被中国人或被印尼共产党暗杀。甚至到了1988年还有人写文章刊于香港《大成》杂志，说他到过印尼旅行，听苏门答腊棉兰的华侨说，郁达夫是被王任叔出卖因而致死的，当然更是无稽之谈。”

“1985年9月铃木应中国纪念郁达夫殉难四十周年学术讨论会的邀请，出席在浙江富阳郁达夫故乡举行的大会，第一次公开发表郁达夫确为日本宪兵队秘密杀害的证据确凿的报告。至此，经过四十年之后，郁达夫之死才真正大白于天下，可以盖棺论定了。”

22 陳子善「一個後輩的懷念」、『胡愈之印象記』（北京：中国友誼出版公司、1989年）収録。次はその原文の一節である。

胡愈老的长文《郁达夫的流亡和失踪》以大量无可辩驳的事实，首次揭开了郁达夫失踪之谜，在郁达夫研究史上占着重要的地位。但是限于当时的客观条件，这篇文章也存在不足之处。文中说郁达夫1945年8月29日晚失踪，9月17日被害。根据当时日寇已宣布投降的形势，似乎不大可能把郁达夫关押半个多月再下毒手，因此，我对郁达夫死于1945年9月17日说产生了怀疑。1983年下半年，日本研究郁达夫的著名学者铃木正夫先生到复旦大学访问，我有机会与铃木就这个问题多次交换意见。铃木透露他已找到当年下令杀害郁达夫的日本宪兵队头目，并掌握了关键性的证据，



只是这个头目不敢公开承认。这个消息非同小可，我马上写信向胡愈老和郁达夫的另一位好友楼适夷先生汇报。翌年夏天，楼先生到上海，打电话约我见面，说是胡愈老要我传话给我。我赶到楼先生住处，看了胡愈老的信，始知他老人家非常关心此事，他把我的信转给楼先生，并要楼先生转告我，他坚信郁达夫为日本宪兵所害，但这并不妨碍我们进一步探讨郁达夫被害的详细经过，他要我与已经回国的铃木保持联系，敦促铃木利用他的有利条件，把郁达夫被害真相搞个水落石出。显而易见，胡愈老并不因为日本学者和我对他文中所说有不同看法而感到不快，而是尊重事实，欢迎争鸣，以实际行动提倡学术自由，这种宽容、豁达的态度尤其使我感动。

于是，我遵照胡愈老的嘱托，在与铃木通信时多次提到此事，希望他能进一步调查。铃木经过再三努力，终于说服那个宪兵队头目正式承认是他下令在 1945年8月29日晚或30日凌晨秘密绑架杀害了郁达夫。铃木的调查报告在1985年9月富阳郁达夫学术讨论会上宣读后引起海内外轰动，会后我把协助铃木整理的调查报告中文稿寄给胡愈老，让他老人家分享我们的喜悦。

- 23 前出李振声訳『蘇門答臘の郁達夫』（上海：遠東出版社、1996年6月）を参照せよ。

賈植芳序言の關係箇所は以下の通りである。

“铃木先生为了查清太平洋战争时期，从1938年起流亡苏门答腊岛的郁达夫，作为一个正直的知识分子和文学家的生活处境，以及在日本投降后，又被当地日本驻军杀害的真相，前后花了二十多年的精力，他在查阅了苏门答腊棉兰法庭审讯日本战犯的档案后，又三次只身下南洋，作了广泛深入的调查，寻访了许多和郁氏有过直接接触的以原宪兵为主的日本人，直至追寻出那个下令杀害郁氏的凶犯，在此基础上撰成了我们眼前这本专著。”

“在这部专著里，铃木先生则第一次详细披露了事情的整个经过，他是如何追寻到当年下令杀害郁达夫的那个班长的，又是如何引出他的自供的，对有关郁达夫被害日期上存在的种种传闻，甚至以讹传讹的一些说法，也一一加以廓清，从而使得这一长达半个世纪的历史疑案，终于有了一个信实的历史结论。”

- 24 北京：『中国現代文学研究叢刊』1997年第2期。

“日本郁达夫研究专家铃木正夫先生，11年前在中国（富阳）的讲台上，以其长期的调查、考证所得，第一次向世人报告了《郁达夫被害真相》，为中国学术界所称道，这次二度赴会所发表的演讲，让中国学者知道了他仍在为此举进行更深入的探索。”

- 25 羅以民『天涯孤舟——郁達夫伝』第257-266頁。羅氏の見解については、鈴木正夫氏自身は、「郁達夫被害に関する日中間の見解の相違について」（『横浜市立大学論叢』人文科学系列 第57巻 1・2合併号、2006年3月）では、詳細な回答と反論を述べている。

- 26 この文章を日本語に訳すにあたっては、鈴木正夫氏ご自身の翻訳も参考にした。前掲注25を参照せよ。

- 27 郁風「郁達夫—蓋棺定論の晩年」、郁風編『郁達夫海外文集』（北京：生活・読書・新知三聯書店、1990年）を参照せよ。

- 28 ブログ「一個人的国家地理」に載せられた署名「太陽之舞」の「郁達夫之死」（2008年10月2日）では、次のようなコメントがある。

我们之所以采用铃木正夫的说法，主要是因为：

一、这一说法有证言和证人，尤其是杀害郁达夫的主谋（宪兵班长D）健在并被铃木正夫追寻到了，由他手写的“自供状”当然真实可信。而胡愈之报告所根据的是从当年联军总部情报处获得的消息，当时录取的战犯口供并未一同公布，缺乏直接的证据，因而其可靠性没有完全证实。

二、铃木正夫是一位忠于事实、有良知的日本学者，他的认真和执著的精神很值得我们钦佩。再说，一位日本学者能帮助我们揭开“郁达夫之死”的谜团，当然是一件好事，我们中国人应当对

之表示感谢。

URL : [http://blog.tianya.cn/blogger/post\\_show.asp?BlogID=43130&PostID=15382416](http://blog.tianya.cn/blogger/post_show.asp?BlogID=43130&PostID=15382416)。

- 29 前出「太陽之舞」「郁達夫之死」を参照せよ。

罗以民在这本书中没有拿出任何材料，来证实“郁达夫极可能死于日本宪兵高层的某人之手”。“可能”不等于“真实”。除非罗以民出示过硬的材料，如像他要求铃木正夫的那样，人们就只能把他的上述论断同样看作是“一种推测”。

- 30 “作为一个日本人，一个私淑郁达夫作品的读者，怀着安抚和告慰冤魂的心念”，完成了这本耗时25年，到目前为止中外记述郁达夫在南洋的真实处境和被害真相最详实、最准确的专著。25年，人生能有几个25年？为了研究一个中国作家的最后几年，但就这一点，也令我对铃木先生肃然起敬了。”“铃木先生在查清史实真相后在书的末尾写道：‘日本人发动的战争，导致了郁达夫的惨遭横死。他的死，让日本人永远背上了罪责。’作为一个曾经与铃木先生有过些许交往的普通中国文学工作者，我向远在日本的铃木先生致以敬意，他是一个真诚的学者，他的书是历史的真实记录。”

URL : <http://ludi1228.blog.163.com/blog/static/91637637201102302338486/>。